

少年・春

竹久夢二

青空文庫

「い」とあなたがいうと

「それから」と母様は仰言おっしゃった。

「ろ」

「それから」

「は」

あなたは母様の膝ひざに抱っこされて居た。そこでは凧こがらが恐おそしく吼ほえ狂うので、地上のありとあらゆる草も木も悲しげに泣き叫んでいる。

その時あなたは慄ふるえながら、母様の頸くびへしっかりとしがみついたのでした。

凧すさまが凄すさましく吼え狂うと、洋燈ランプの光が明るくなつて、卓テーブルの上の林檎りんごはいよいよ紅あかく暖炉の火はだんだん暖あたたかくなつた。

あなたの膝ひざの上には絵本が置かれ、悲しい語はなしのところが開かれてあつた。それを母様は読んで下さる。——それはもうまえに百遍も読んで下さつた物語であつた。——その時の

母様の顔色の眼は沈んで、声は低く悲しかった。あなたは呼吸をこらして一心に聴入るの
でした。

誰ぞ、駒鳥を殺せしは？

雀はいいぬ、われこそ！ と

わがこの弓と矢をもちて

わが駒鳥を殺しけり。

これがあなたの虐殺者というものを聴知った最初であつた。

あなたはこの恐ろしい光景を残りなく胸に描き得た。この憎むべき矢に射貫かれた美しい暖い紅の胸を、この刺客の手に仆れた憐れな柔かい小鳥の骸を。

咽喉が急に塞がって、涙があなたの眼に浮かぶ。一滴また一滴、それが頬を伝って流れ
ては、熱いしかも悲しい滴りが、絵本のうえに雨だれのように落ちた。

「母様、駒鳥は可哀そうねエ」

「坊や、泣くんじやないよ」

「でも母様、雀が……雀が……こ……殺しちゃったんだもの」

「ああ、そうなの。雀が殺してしまったのよ。本にはそう書いてありますけれど、坊やは

聞いたことがありますか」

「何^なあに」

絵本は、その悲しい話の半面を語ったに過ぎなかつた。他の半面は母様が知っていないさつた。駒鳥は殺された。殺されて冷^{つめた}い血^{ちしお}汐^{しお}のなかに横^{よこ}わつたことは事実であつた。けれども慈悲深い死の翼あるその矢のために、駒鳥は正直な鳥の、常に行くべき^{ところ}処へ行つた。そしてそこで——ああ嬉^{うれ}しい——彼は先へ行つて居た自分の最愛の妻と子にそこで逢^あつたのでした。

「駒鳥の親子は、今はみんなそこに居るんですよ。この世に住んだうちでは一番しあわせな駒鳥なんだよ」と母様はあなたの涙に濡^ぬれた頬にキツスしながら仰^{おつ}言^{しゃ}つた。

大きく見ひらいたあなたの眼には、もう涙は消えていた。あなたは正直な鳥の行くべき処に居る駒鳥のことを遠く思いやつた。駒鳥の眼、駒鳥の紅^{あか}い胸は再び輝いて居た。彼は嘖^{さえず}り、歌い、そして妻子を連れて枝から枝へと飛び移つた。小さい話を繕^{つくろ}うことも、小さい人の心を繕^{つくろ}うことも、小さい靴下を繕^{つくろ}うことのように母様は実にお手に入つたものであつた。こんな時にはいつも、あなたの靴下からは膝小僧^{のぞ}が覗^{のぞ}いて居た。日の暮れには、きまつて靴下に穴があいて、そこから泥だらけな膝^{ひざ}が見えるのでした。

「まあちよつと御覽なさい、たつた今洗つてあげたばかりじゃありませんか」といって、母様はあなたがおよる前に、湯殿へ連れておいでになる。あなたは大きな盥たらいの縁に腰かけて、脚で水をぼちやぼちやいわせながら、母様の横顔を見ていた。

「まあ汚い児こだねえ」と仰おつしや言つて、母様はあなたの生傷のついてる真ま黒な膝を洗つておやりになった。そして綺麗きれいになったところで、いつでもこう言いなされる。

「まあ、うちの光る児！」

そしてあなたの靴下は、あなたが朝お家うちを飛出す時にはいくら綺麗であつても、夕方またお家へ帰つて来る時には、もう見るかげもなく汚れているのでした。そこで例によつて、それ糸巻はどこにある？ 糸は？ 針は？ という騒さわぎが始まるのです。

夏の朝、母様は庭の離れでお針箱はりばを側へ置いて縫物をなされるのが常だった。太陽は網の目のようになつて居る木木の緑を透とおして金色こんじきの光を投げた。鳥も囀さえずりに倦あき、風もまどろむおやつゆの時にも、母様はなおやめずに針を動かしておいでだった。日が暮れてお夕ゆう餉んが済んでもなお母様は、黄色い洋燈ランツの光のしたに針を動かしておいでだった。

「母様はなぜそんなにチクチクばかりしてるの？」

「坊やには青い水兵服と、嬢には紫のお被布を拵こしらえてあげようと思つてさ」

「母様はチクチクが好きなの？」

「そうとも思わないけれどね」

「だつて……母様は飽きないの？」

「ああ、そりや時時はねえ」

「じやお休みなさいよ。ねえ母様」

「お休みつて？ 坊や。ああ休みましょう。いま少し縫つて、そしたら遊びましょう」

「だつて、母様は、いま少し、いま少しつて、一日かかっちゃうんだもの、ねえ、母様でば、母様」

あなたは少し考えて

「もう縫わなくつてもいいのよ」

「もういいつて？ この児は」と母様はお笑いなすつた。あなたも笑つた。

後にあなたは、

「母様とは私の面倒を見て下さつて、私を可愛かあいがつて、そして、いま少し、もう少しつて

——終いちにち日——縫物をして居る人です」

と人人に話してきかせたのでした。そうすると、その人達は、母様が子供達の面倒を見て下さるからには、子供達もまた母様の為にしてあげなければなりません。とあなたに話しました。そして、あなたは実にその言葉の通りにやった。母様のまえに立塞たちふさがって、あなたは勇ましく拳こぶしを握りしめた。

「私の母様に触つちやいけません！」

あなたの唇はわななき、眼めは怒いかりと涙で輝いて居た。けれども、母様はあなたをかばいながら、

「パパさんは、串談じょうだんなんですよ」母様はあなたを胸に抱きよせて、

「御覧よ、パパは笑つてらつしやるよ」と仰言おっしゃった。

パパは

「やアい、こわつぱ、パパは串談でやつてるんだよ」

母様は、ほほえみながら、しかもほこりがに、あなたの涙を拭ぬぐっておやりになった。あなたは、あなたの方へ手を差出して居るパパを、いぶかしげに見やった。そして母様に押し入れながら、おずおずとパパのところへ行つた。

パパは仰言おっしゃった。

「お前はいつでも今のようだれに母様に尽さなければなりません。そしてパパが居ない時には、よそ誰でも他処の人に、母様がいじめられないようにするんですよ」

母様はあなたの額にキツスして、

「母様を護る軍人なんだから」

そしてこれからのちは、あなたが近くに居る時には、母様に心配はなかった。

「ああ、あの荒木の奥さん、あれにはまた弱って仕舞うねえ」

と母様は低い声で仰言つたけれど、あなたはそれをきき逃さなかった。そして小さい全精神をあげて荒木夫人を憎んだ。ついにその奥さんの勘定日が来て、奥さん自身やって来た。母様は庭に居て聞きつけなかった。あなたは自分で挨拶に出た。

「母様には、今日は、逢えやしないよ」あなたがしやちこばっていうと

「それは変ですねえ」と荒木夫人は一足進んで言った。

「駄目だい」あなたは力一杯にドアにつかまって、声を張りあげた。

「駄目だよ。這入つちやいけないよ」

「おせっかいだつちやありやしない」荒木夫人は、威しつけるようにいったけれど、あなたは、めげずに睨めつけて、声を張りあげ、

「もう、僕の母様にや逢えやしないよ」

と断乎して繰りかえした。

「何故ですか？ 承りたいものですが」と荒木夫人はみるみるふくれあがった。

「いったい如何してなのです？ それを聞きましょう」

「何故って、父様がいない時には母様の面倒を坊やが見てあげるんだい。母様が逢いたくないような奴に母様がいじめられないようにしろって父様が言ったんだもの」

文句が長かったので、一息でいってしまうのは大抵の事ではなかった。

荒木夫人は干からびたような嘲笑を洩して

「ああそういうんですか？ それでお前さんは、何故お前さんのお母様が私に逢いたくないのか、その訳を知っていなさるかえ？」

「だって——母様、そう言ったもの！」

あなたの言ったことはきれぎれで恰度「いろは」の御本を読むようだったので、荒木夫人は呑込めなかつたかもしれなかつた。

しかし、兎に角、うまく行つた。荒木夫人は火のように怒って、鼻息を荒くしながら、裾を蹴返して帰って行つた。

「もう決して決して」といって、門の戸をピシヤリと閉めた。

あなたは静かにドアをしめた。

戦は勝てり！

あなたは庭へ引返した。

「もう済んだ、もう済んじやった。」

「何がもう済んだっての、坊や」

「荒木の奥さん」とあなたは答えた。

こんな風にあなたは母様に尽した。母様はますますあなたを可愛がり、あなたもますます母様に尽したのでした。この日頃あなたは病気ではあったものの、なお且機嫌がよかつた。何故って母様がおいしい物を拵えては、お茶碗に散蓮華を添えて持つて来て下さるたんびに、お代りのいるほど食べた——死なないって証拠のように。そうしては柔かい枕をして母様が手づから拵えたツギハギの丹前を掛けて横になった。枕もとには母様が嫁入の時に着たキモノの絹の小さなキレや、母様がずっと昔、まだ桃割を結つてた時分の、他処行のお羽織の紺青色のキレがあつた。まだまだお祖母さんのキモノの柔かい鼠色

のキレや、春さんののであったピカピカ光る桃色ののや、父様が若かった男盛の頃のネクタイだった條のあるのや、藍色ののや黄色いのもあった。病に疲れてものうく、眠む気がさして、うっとりとして来るにつれて、その嫁入衣裳のキレは冷たい真白な雪に変わる。すると櫛の鈴の音が聞えて来る。

隅っこの方に小さな教会のついて居るクリスマスカードが見える。その教会の塔は凍って居たけれど、その窓はクリスマススの輝きで明るく暖かかった。

つぎに紺青色のは空であった。

そして、それを見て居ると、小鳥や、星や、三月弥生のことなどが思い出されるのであった。

もしお祖母様のものであった鼠色のキレに眼を移すならば、緑色だった空は忽ち暗くなつて雨が降つて来る。

けれどもお春さんののであった桃色のキレや、父様のだった藍色ののや黄色のを見さえすれば、すぐに花が咲いた、お日様がまた輝くのでした。

やがていろんな色がごつちやになつて、こんがらがってしまう、蒲公英がちらちらと鳴つたり、櫛の鈴や董が雪のなかで花を開いたり。そしてあなたは眠ります。その眠り

が小さな子供を健康にするのでした。

2

春が来た。

桜の枝には蜂はちと風とが音ねを立てて居る。庭にはあなたと母様と二人きり白い花卉が雪のように音もなく散りかかる。

小鳥は朝の輝きのうちに囀さえずっていた。

あなたは躍り、笑い、且かつ歌った。

あなたの大きくみひらいた眼には、果てなき大空の藍色と見渡す草原の緑とが映り紅を潮さした頬ほおには日の光と微そよ風かぜとが知られた。

「母様見て御覧なさい、坊やが飛上りますよ」

「まあ」

「今度は逆立ち」

「まあ、お上手なこと」

「母様、坊やは大きくなってから何になるか知ってますよ」

「何になるの」

「曲馬師になるの」

「まあ」

「大きい白い馬に乗って、ねえ母様」

「まあいいことね」

「そしてお月様なんか飛越しつちまうんだ」

「お月様を、まあ」

「ええお月様を、見て御覧なさい」と言っただけあなたはそのとにあつた熊手くまでの柄を飛越えた。

それがお月様を飛越す下稽古したげこでした。

「けども坊やは曲馬師にはならないかも知れないの、きつと、ねえ母様」

「曲馬師にならないって」

「ぼくは、ジョージ、ワシントンのように大統領になるの、父様がなれるっていいましたもの、なれるでしょうか、え、母様」

「そうね、なれましょうよ、何時いつか」

「だけでも次郎坊じろうぼうなんかなれやしませんね、母様」

「何故なぜ次郎さんはなれないの」

「だって次郎坊は約束してもすぐ嘘うそいうんだもの。ぼくは言わないの、ジョージ、ワシントンも言わなかったから」

「そうそうその方がいいんですよ、曲馬師と大統領とはまるで較くらべものになりません」

「ぼくは母様、ぼくきつと大統領になりますよ」

「まあいいこと、屹度きつとなるんですよ」

母様は離れで縫物を始めなさる。

「母様」

「はあい」

「今から歌を歌いますよ」

ほどよい庭へ真直まっすぐに立ち、踵きびすを揃そろへ両手を真直に垂れて「気を付け」の姿勢であなたは歌いはじめた。

天はゆるさじ良民の

自由をなみする虐政を

十三州の血はほとぼしり

「もう少し静かにお歌いなさいな」と母様が仰おっしゃ言った。

天はゆるさじ良民の……

「それじゃあ聞えやしないわ」と母様はお笑いになった。あなたはちよつと、妙な笑いかたをしてまた声を張りあげる。

自由をなみする虐政を

十三州の血はほとぼしり

ここに立ちたるワシントン

「まあお上手だねえ」と母様は仰おっしゃ言る。

「さあ今度は母様の番だよ。母様何かお嘸はなし」

「お嘸」

「ええあの董すみれのお嘸」

「董の」といつて母様は、夢見るように針の手をとめて、

「青い青い董が——」

「空のように青いのねえ、母様」とあなたは口を入れた。

「空のように青い、そう昔はね、この世界に堇が一つも無かったの」

「それからお星様もねえ、母様」

「ええ堇もお星様もこの世界になかったの。そこでねえ坊や、青い空をすこしばかり分けて貰^{もら}ってそれを世界中に輝^{かがや}かしたものがあつたの。それが堇の一番はじまりなんだよ」

「それからお星様は？」

「坊やは知^しつてるじゃありませんか。お星様はね、青い空の小さな穴ですよ。そこから天の光が輝^{きら}く小さな穴ですよ」

「ほんとう、母様」とあなたは言^いつて母様を見あげる。

母様の眼^めは堇のように青く、星の様に輝^{きら}いて居^ゐた。天^{そら}の光が輝^{きら}いて居^ゐつたから。

母様は世界中で一番不思議な人であつた。

母様は嘗^{かつ}て悪い事をしたことがなかつた。そしていろんな事を知^しつて居^ゐた。夜も昼も子供^{こども}の事を見ておいでなさる神様をも知^しつて居^ゐた。また神様はあなたの髪^{かみ}の毛^けの数^{かず}さえも知^しつておいでなさるのみならず、子鳥^{こどり}が死ぬ^{しぬ}のを一羽^{ひと}だつても、神様の知^しつて居^ゐなさらぬことはない^{ない}と母様は話^わしてきかせなされた。

「そんならねえ母様、神様は、あの駒^{こま}鳥^{とり}の死^しんだ時^{とき}をも知^しつて居^ゐるの？」

「知つてなさるとも」

「それじゃあ、ぼくが指を傷めた時をも、知っているの？」

「ああ、何でも知つていなさいますよ」

「そんなら、ぼくが指を傷めた時には、可愛かあいそうと思つたでしょうか、え母様」

「それは可愛なげそうだと思いなされたともね」

「じゃ、何故なげ神様はぼくの指を傷める様になされたの？」

暫しばらく母様は黙つておいでだった。

「まあ坊やは、それは母様には解わからないわ。神様より外には誰だれも知らない事が沢山あるのです」

あなたは母様の言葉をあやしみながら、母様の膝ひざのうえに抱かれて居た。

空のどこかに、雲のうへの輝き渡る大きなお宮の中に、金の冠いただを戴いた神様がいらつしやることをあなたは知つて居た。そしてその下の緑の世界には、小鳥が死んだり、小さな子供が指を傷めて、母様に抱かれて泣いたりするのです。

神様はすべての事、すべての人を視みていらつしやつた。けれどもそれを助けはなさらなかつた。

あなたは、母様の頸くびに両手をまわして母様の胸かじに噛りついた。

「母様！ ぼく神様はいや、神様はいや！」

「何故坊やはそんな事いうの？ 神様は坊やを可愛がつてらっしやるのに」

「だって、だって、母様、母様がなさる様じやないもの、神様は母様のようじやないんだもの」

蜂はちと風とは林檎りんごの枝に音を立てて居た。もう五月になったのだ。庭にはあなたと母様とただ二人、真まっしろ白しろな花びらが雪のように乱れて散る。あなたはお祖父じい様さまが拵こしらえて下すつたブランコに乗つた。

青葉の影はそよ風につれて揺れる。あなたの心はあなたの夢みるまに揺れた。

風は林檎の枝に歌い、花のたわわな枝は風に揺れ、風に撓しなつた。

あなたの頭上はすべてこれ空飛ぶ鳥と、鳥の歌。あなたの周囲まわりはすべてこれ、風に光る草の原であつた。

あなたはブランコが揺れるまに、何時いつかしら、藍あいいろ色のキモノに身を包んで藍色の大
海原を帆走かこる一個の船夫かこであつた。

風は帆綱に鳴り、白帆は十分風を孕んだ。船は閃く飛沫を飛ばして駛せた。鷗は鳴いて大空に輪を描いた。そうしてあなたは、海の風に髪をなぶらせつつ、何処までもと、ひた駛せに駛せた。

船は錨を下した。

動揺は止んだ。

あなたはもとの子供であつた。

「母様」

と夢心地であなたは静かに言った。声はまだ眠そうだった。母様は聞きつけなかった。母様はやはり離れで笑いながら坐つておいでなされた。針の手は鈍つて縫物が膝からすべり落ちそうであつた。

あなたの母様は世界で一番優しい人、あなたはその母様の秘蔵つ子であつたことを、今こそ知つては居るものの、あなたはその時まだそれを知らなかった。

母様の庭で、母様の膝の上で、母様の手に抱かれて、母様の頬にああなたは両手をあてながら、母様の眼の藍色の床しさをあやしみつつ見詰めた。そして情あふれる母様の声を嬉しく聞いた。

「可愛い坊や」

「え」

「私の大切な可愛い坊や」

と、いつて母様はあなたを胸に抱きよせて、頬ずりをなさる。

「何日かねえ、このお庭で、この離れで母様は坊やの夢を見たのよ」

「坊やの夢を？ えッ母様」

「ああ坊やの。恰度ちやうどこの庭でね、その月見草が花盛りで鳥が鳴いて居たの。母様は、坊やが小さな赤ん坊だったところを夢に見たの。ああ、その時に風は月見草の花に歌をうたつてきかせて居ましたよ。母様はねえ。坊やにねんねこ歌を歌つてきかせたのよ。そうするとねえ、坊やが私の方へ手を伸べて笑つたの、それから……ねえ、坊や……」

「でも母様、それは夢だったの」

「それはほんとの夢だったの、そしてそれがほんとうになつたの。それは六月のある晩にほんとうになつたの。——六月のおついたちに……」

「ぼくの誕生日に」

「坊やの誕生日に」

息もつがずあなたは言った。

「母様、美しい夢ね」

青空文庫情報

底本：「童話集 春」小学館文庫、小学館

2004（平成16）年8月1日初版第1刷発行

底本の親本：「童話 春」研究社

1926（大正15）年12月

入力：noir

校正：noriko saito

2006年7月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

少年・春

竹久夢二

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>